

第一篇

幽<sup>ゆう</sup>  
界<sup>かい</sup>  
の  
探<sup>たん</sup>  
険<sup>けん</sup>

靈主体従

子の巻  
〔靈界物語 第一卷〕

第一章 靈山修業(行) (一)

高熊山は上古は高御座山と称し、のちに高座といい、ついで高倉と書し、ついに転訛して高熊山となったのである。丹波穴太の山奥にある高台で、上古には開化天皇を祭りたる延喜式内小幡神社の在った所である。武烈天皇が継嗣を定めむとなしたまうたときに、穴太(穴生)の皇子はこの山中に隠れたまい、高倉山に一生を送らせたまうたという古老の伝説が遺つておる靈山である。天皇はどうしても皇子の行方(行衛)がわからぬので、やむをえず皇族の裔を探しだして、継体天皇に御位を譲りたまうたということである(ので在ります)。またこの高熊山には古来一ツ(古来一)の謎が遺つておる。

『朝日照る、夕日輝く、高倉の、三ツ葉躑躅の其の下(下)に、黄金の雞(鶏) 小判千両埋けおいた』

昔から時々名も知れぬ鳥が鳴いて、里人に告げたということである。自分(王仁)は登山すること、三ツ葉躑躅の株は無いかと探してみたが、いつも見当らなかつた。大正(昨)九年の春、再度(信者と俱に)登山して休息しておると、自分(王仁)の脚下に、その三ツ葉躑躅が生えておるのを見出し、はじめてその歌の謎が解いたのである(ります)。

『朝日照る』という意義は、天津日の神(天津日嗣天皇)の御稜威が旭日昇天(旭日東

天)の勢をもって、八紘に輝きわたり、夕日輝くちよう、他の国々(西洋諸国)までも神徳(皇徳)を光被したまう黄金時代の来ることであつて、この靈山に神威靈徳を秘めおかれた という 神界の謎である。

『三ツ葉躑躅』とは、三つの御霊(三の御魂)、瑞霊の意である。ツツジの言霊は、萬古不易(万世一系天壤無窮の皇運を扶翼し奉る神人)の意である。『小判千両埋けおいた』大判は上を意味し、小判は下にして、確古不動(確固不動)の権力を判というのである。すなわち小判は小幡ともなり、神教顕現地ともなる(のである)。穴太の産土(小幡)神社の鎮座ありしも、御祭神(御祭神)が開化天皇であつたのも深い神策のありませることと恐察し得られる(得るのである)。これを思えばア、明治三十一年如月の九日、富士浅間神社の祭神(祭神)、木花咲耶姫命の天使(神使)、松岡芙蓉仙人に導かれて、当山に自分(王仁)が一週間の修業(神示の修行)を命ぜられたのも、決して偶然ではないとおもつ(のであります)。

神示のまにまに、高熊山に出修したる自分(王仁)の靈力發達の程度は、非常に迅速であつた。汽車よりも飛行機よりも電光石火よりも、すみやか(迅速)に靈的研究は進歩したよつに思つた(のである)。たとえば幼稚園の生徒が大学を卒業して博士の地位(博士の位置)に 瞬間に 進んだよつな進歩であつた。過去、現在、未来に透徹し、神界の秘奥を窺知(窺知)し得るとともに、現界の出来事など(そ)は数百年数千年の後まで知悉

し得<sup>え</sup>られたのである。しかしながら、すべて一切<sup>いっさい</sup>神<sup>しん</sup>秘<sup>ひ</sup>に属<sup>ぞく</sup>し、今日<sup>こんにち</sup>これを詳<sup>しょう</sup>細<sup>さい</sup>に発<sup>はつ</sup>表<sup>びょう</sup>することのできないのを遺<sup>い</sup>憾<sup>かん</sup>とする（次第<sup>しだい</sup>である）。

（故<sup>ゆえ</sup>に王<sup>わ</sup>仁<sup>にん</sup>が前<sup>ぜん</sup>後<sup>ご</sup>一<sup>いつ</sup>週<sup>しゅう</sup>間<sup>かん</sup>に於<sup>お</sup>ける修<sup>しゆ</sup>行<sup>ぎやう</sup>に依<sup>よ</sup>りて肉<sup>にく</sup>体<sup>たい</sup>靈<sup>れい</sup>魂<sup>こん</sup>上<sup>じやう</sup>に得<sup>え</sup>たる神<sup>しん</sup>德<sup>とく</sup>の結<sup>けつ</sup>果<sup>か</sup>を發<sup>はつ</sup>表<sup>びょう</sup>する事<sup>こと</sup>にのみ、留<sup>とど</sup>めて置<sup>お</sup>こうと思<sup>おも</sup>う。）

本 居 宣 長

世の中は善<sup>よ</sup>事<sup>こと</sup>まがこと行きかはる

中よぞ千々のことはなり出る

おほけなく人のいやしき心もて

神のなすわざあらそひ得めや